成蹊大学日本文学科　日本探求特別講義Ａ

2012年　**和本で見る書物史**

第１２回　和本の調べ方　**表紙・分類・都市名など**

橋口（はしぐち）　侯之介（こうのすけ）

和本入門　pp154-158 pp198-203 など

江戸時代の分け方

260 年続いた江戸時代、均質だったわけではない。本を考えるとき、一般の歴史を考えるのと同じように時代をまず三つに分ける。

前期　慶長の開府からおよそ 100 年間。すなわち 17 世紀。特に慶長・元和・寛永（1640 年まで）を「江戸初期」といって区別する。

中期　研究者によって元禄(1688-1705)から、あるいは享保(1716-1736)からを中期という。およそ 18 世紀中。

後期　研究者によって前後するが、おおむね寛政(1789-1801)頃からをいう。少なくとも文化・文政以降（1804-）から明治維新までを後期とする。19 世紀。とくに嘉永以降を幕末とか江戸末期ともいう。

巻数と冊数

和本では本に「巻一」「巻二」というように巻数を数字であらわす。

これは書物が巻子本だった時代の名残である。しかし、かつては１巻がひと巻の単位だったが、しだいに１巻＝1 冊ではなくなり、江戸時代の巻は、今日の「章」くらいの意味となった。

したがって、全何巻で構成されているかが重要で、冊数は個別の問題である。

表紙の時代性

江戸時代の本の９０％は袋綴じ製本。それに厚手の表紙をあてがい糸綴じしてある。その表紙を見ただけで時代がわかるものである。本の中には奥付の整備されていない（無刊記本）も少なくないが、それでも表紙でおよその年代が推定できる。

江戸初期の「栗皮表紙」(くりかわびょうし)

江戸中期の「行成表紙」(こうぜいびょうし　**右図**)

「丹表紙」は江戸初期と江戸後期に二度流行る。

「型押し」や「丁子引」(ちょうじびき　**右図**)の技術は江戸後期から

色刷り絵入りの表紙は、草双紙が得意。これが近現代の表紙へ。

都市の表現

いつも同じにしか表現できないのはむしろ「野暮」である。いろいろにいい分けるところが「通」。

京都　京　平安　平安城　京師（けいし）　京城（けいじょう）　洛陽（らくよう）　西京（せいけい）　西京（せいけい）　皇都（こうと）　京兆（けいちょう）　西都（さいと）　帝都（ていと）

大坂　大阪　浪華（なにわ）　浪花（なにわ）　浪速（なにわ）　難波（なにわ）　摂州（せつしゅう）　摂陽（せつよう）　摂都

江戸　東都　荏土　江都（ごうと）　江府（ごうふ）　武江（ぶこう）　武陽（ぶよう）　東京（とうけい）　東京（とうけい）　御府内（ごふない）

和歌山　若山（わかやま）　紀府（きふ）

名古屋　尾府（びふ）　尾陽（びよう）

水戸　水府（すいふ）　常陽（じょうよう）

分類

本をどのように分類するか。中国では盛んだったが日本では分類学は進まなかった。
江戸時代の分類はおおざっぱで、仏教・儒学・医学・仮名程度だった。
現在は研究のために分類を定めている。
『国書総目録』では分類語を提起しただけだが、国文学研究資料館では、19 部門約 400 項目を策定して順番付けができるようにした。なお、同一分類の中の並べかたは、著作の年代順とし、著者は没年順とするのが決まりである。(『和本入門』p155 参照)

漢籍の分類法・四庫分類
唐代に整備した四部の分類に始まる。『隋書』にはその志の中に、王朝が所蔵していた書籍の目録が「経籍志」という名で載せられた。そのとき、およそ 36000 巻を経・史・子・集の四部に分けて分類した。
経部　五経・論語など儒教の基本文献
史部　歴史や法制・伝記・地方誌など
子部　老子や荘子をはじめ諸子百家の説に、天文暦法・医学・雑著など
集部　楚辞以来の詩文などの創作的作品集。

1．経部　易経・書経・詩経・礼類・春秋・孝経・四書（大学・中庸・論語・孟子）・小学・字書・韻学
2．史部　正史・編年・雑史・詔令奏議・伝記・地理・職官・政書・書目・金石
3．子部　儒家・兵家・法家・医家・本草・天文算法・術数（占卜相法・陰陽）・法帖・篆刻・雑家・類書・小説家・異聞・伝奇小説・釈家・道家
4．集部　楚辞・別集・総集・詩文評・詞曲・戯曲・小説
叢書

この四部の分類法は改訂を繰り返し、磨きあげられて清朝期に完成した。朝廷内には四部それぞれを収納した書庫があり、それを四庫といった。乾隆帝の命でこの分類によって書物を集大成したのを『四庫全書』という。歴代中国最大の叢書である。
綿密に漢籍を分類するようになったが、中国では大衆向けの本が少なくまた軽んじられてきたので、『金瓶梅』や『西遊記』『紅楼夢』などのおなじみの小説は、じつは入るところがなかった。ほんらい、説というのは天下国家を論じることで、そうでない「とるにたらない小さい説」のことを小説といった。それで子部のなかに「小説家」という項目があって、伝奇とか異聞という小項目をもうけ、変わった読み物の類はなんでもここに入れていた。清朝が終わって、中華民国時代になって文学者・魯迅の尽力で、今では集部に「小説」を入れて、ようやく文学として分類されるようになった。

年代の基礎知識

明治以降は天皇一代に一年号だが、江戸時代まではそれにかかわらず改暦が行われてきた。
世の中に災害や不穏な動きがあると年号を変えて災厄を避けようとした。

和本の刊記には「享保壬子歳仲夏吉旦」などと書かれることもある。年数がない。
現代は十二支のせいぜい申か酉かという程度しか使わないが、江戸時代までは十干と十二支を組み合わせた六十通りの干支を日常的に使っていた。奥付などに限らず、和本の方々にある年代表記には干支がたびたび使われる。和本を見るときは、手軽な年表を手元に置いておくと便利である。

十干　甲　乙　丙　丁　戊　己　庚　辛　壬　癸
十二支　子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥

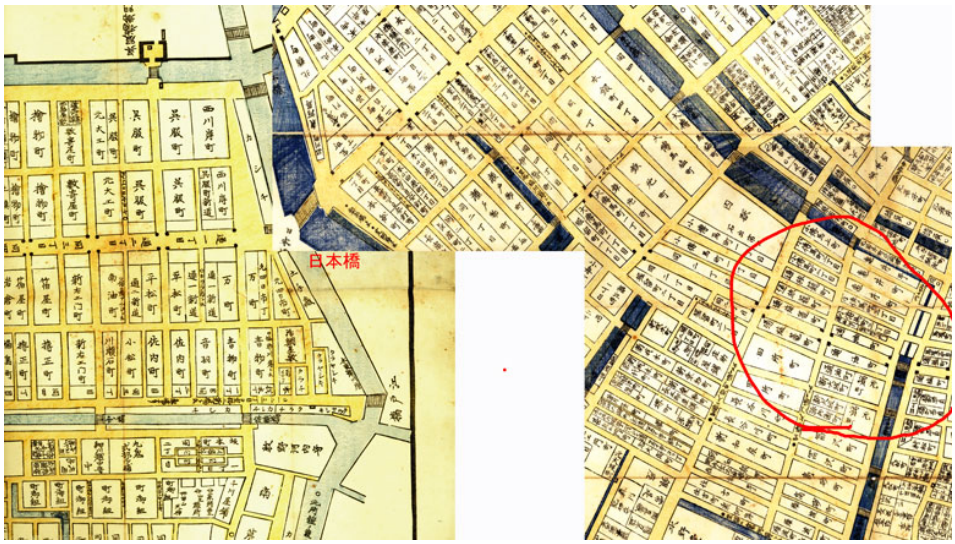
この組み合わせ　甲子　乙丑　丙寅　丁卯　戊辰　…　甲戌　乙亥…　　60 年で一周する。還暦。
甲子の年と辛酉の年には必ず年号を変えるきまりがあった。
また月日は数字より睦月・如月・弥生・卯月・皐月といった月の異名でよく表現される。
正月は睦月のほかに「孟春」「甲春」などともいった。

「仲夏」は旧暦で五月の異名である。また「吉旦」は吉日と同じである。

本屋の名前

人の名前も複雑でたくさん呼称があったように、本屋の呼び方も複雑だった。
江戸で一番の本屋は「須原屋茂兵衛」、京都で代表的な本屋は「村上勘兵衛」、大坂では「河内屋喜兵衛」。
「～屋」のようにふつう呼ばれるのは〈屋号〉という。分家や番頭等が独立した系列店にも同じ屋号を与える。須原屋新兵衛、須原屋伊八など。河内屋は大坂に数十軒あった。
「茂兵衛」「勘兵衛」は〈通称名〉といい、代々襲名した。本人の〈名〉は別にあるが対外的にはいわない。
武士でない商人も〈姓〉を持っていた。須原屋茂兵衛は「北畠」、河内屋喜兵衛は「柳原」、村上は「井上」。
このほかに「千鐘堂」「積玉圃」「平楽寺」という呼び名も持つ。これらは〈堂号〉という。
この名称法は、草紙屋（地本問屋）も同じで、『画本東都遊』の挿絵には絵草子店・蔦屋重三郎の店先が描かれているが、店の外に出す「出し看板」には「通油町　紅絵問屋　蔦屋重三郎」などとあり、上の暖簾に「耕書堂」と堂号が出ている。
本見返しには堂号が、刊記には屋号＋通称名で書かれることがある。

江戸時代の本屋街



江戸は日本橋を挟んで東海道側を「通一丁目」「通二丁目」「通三丁目」といい、その先が銀座、品川である。日本橋の北側が「室町」「本町」で神田・上野に出て日光街道となる。いずれも大きな商店街を形成していた。硬派の物之本をあつかう書物屋は多くが日本橋を中心にしたこの中央通り沿いにあった。
地本問屋は、そこから少しはずれてこの本町を右に曲がり大伝馬町・小伝馬町を経て通油町があって、そのあたりに集中していた。関東大震災と空襲で、今は何もない。かわりに近代に入って大学ができた神田が発達したのである。
大坂は、心斎橋筋という南北の通りがあり、当時一番賑やかなところ。その通り周辺に本屋が並んでいて、壮観だったという。大阪も空襲で面影がない。
京都は、南北に走る寺町通沿いに多く、この二キロ四方に大半があった。今でも古い店がここにいる。
電車もバスもない時代だが、いずれも日帰りで本屋街を散策することができた。